

脚色者 帝國キネマ映畫  
監督者 内田徳司氏  
撮影者 唐瀬弘光氏

主要役割

鴨居新左衛門 瀬川路三郎氏  
息 幾馬 片岡仁引氏  
宮部健兵衛 中村飯嶋氏  
息 勇之助 中村太郎氏  
妹 お菊 松枝鶴子嬢  
藝妓 小よし志 山下澄子嬢  
半玉お雪 明石君江嬢  
父 市川荒十郎氏  
母 市川花十郎氏

〔略筋〕幕末維新の風雲は急であつた。某藩の勢力者宮部健兵衛と鴨居新左衛門は佐幕派の首領であつた。宮部の息勇の助と鴨居の息幾馬は父と反對に勤王論者として彼等は正義の義勇者となつた。幾馬は健兵衛を討ち果して父と激論の末家を後に何ぞか。

勇之助は父の敵が同志であり妹の親たる幾馬である事から深く焦慮し彼の根柢から覆つて大義を忘れ遊里に足を踏み入れた。徳川二百年の長夢は儚なくも夏の夜の如く世は擧げて勤王を叫び、封建の舊衣を脱せんとした。新左衛門はこの潮流を己の意志でせよ止めんとしたが若侍達は彼の横暴を罵り彼を討たんを協議した。急を聞いて歸藩した幾馬は父に再び佐幕論の非なるを説いたが父は其を退けた。最後の日は遂に來た。同志と共に父を討つ幾馬の心は悶へた。その時新左衛門を助けんと來た勇之助の太刀は過つて幾馬を斃した。新左衛門の一命は危くも助つたが吾子の死に總てを悟つた月明の夜、悄然と去る老僧があつた。それは悟道の道に入つた新左衛門の姿であつた。

菊地寛氏の「時勢は移る」に尾語を附けた様な譯りで、相變らず勤王佐幕の争ひに世界を求めた映畫である。内田徳司氏の脚色は俗受を狙はんが爲めか徒らに亂闘を見せたり、蛇足に過ぎないエピソードを挿入して居る事は観客に媚を早する様で不愉快である。然し從來の氏の發表したものの中で畑達ひの別には相當驛つたもの云へよう。廣瀬五郎氏の監督は最早危氣はないが氏の作品としては所謂可も不可もなしと云ふ位の程度であらう。幾馬とお菊の別れはもう一息の人情味が有つて欲しい。俳優では松枝鶴子嬢のお菊が目茶に美しかったのミ、中村太郎氏の幾馬が何時になく誇張した表情をするのが目に残つた。撮影は美しく小よし志の情景なごセプトと共に好く氣分を出し得て居た。

山本 綠葉

興行價値——帝キネマの題名であり、内容であるから誰が見ても娛樂味はたつぷりある。ラストなど女客をアツと云は、同時に泣かせるであらう。(二月二十日 大阪芦邊劇場封切)